# 昆虫と人間のかけ橋

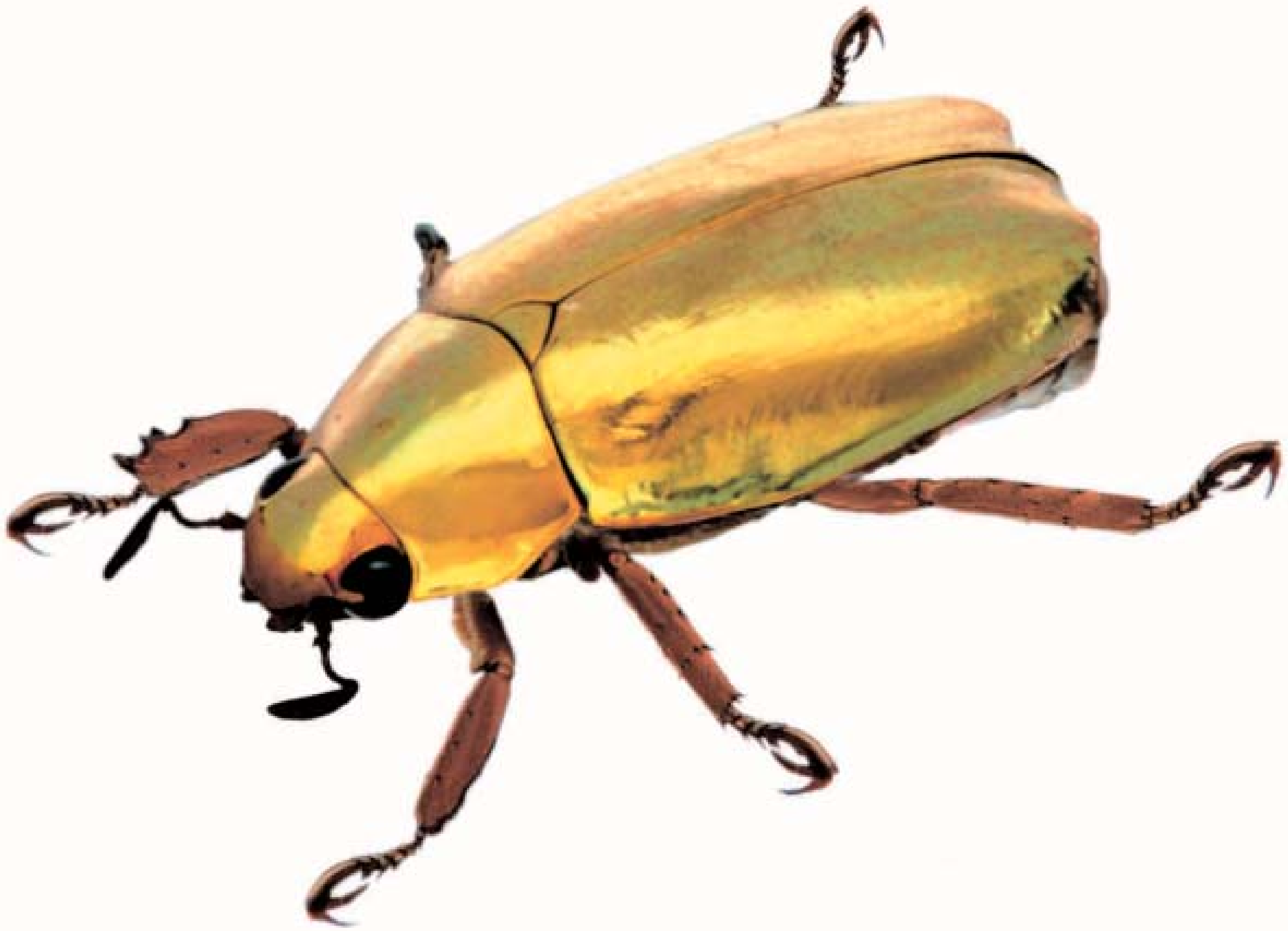
## 見えないものを見る歓び

小檜山賢二

no.017

我々は生まれや生活環境、習慣の中からさまざまな概念をつくり出し、
生きている。しかし、人は自分がつくり出した概念から
なかなか逃れられない。おそらく、驚きに満ちた自然に遭遇したときに初めて、
人は概念を広めたり、多様化することができるのではないだろうか。

キンイロコガネ *Plusiotis resplendens*
コスタリカにいるコガネムシ、仲間には銀色のものもいる
ニコンD1X　AF Micro Nikkor　28-105mm　F3.5
f11　1／25
コンピュータプログラム：森田正彦、上村周平
モデル作成：竹原ルミ子



こひやま・けんじ
1942年、東京生まれ。慶應義塾大学工学部電気工学科修士課程修了後、
日本電信電話公社（現NTT）電気通信研究所において、
ディジタル無線通信方式の研究に従事。
ワイヤレスシステム研究所所長、NTTアドバンステクノロジ株式会社
専務取締役を歴任し、現在、
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授。工学博士
URL:http://kohiyama.wem.sfc.keio.ac.jp

## 概念の崩壊

### 石か木か

米国滞在を利用して、できるだけ米国の自然に接しようと努力している。こちらの国立公園はよく整備されていて、かつ自然を守るという姿勢が一貫していて気持ちがよい。ロサンジェルスに滞在しているせいもあり、中南部、西南部を中心に訪問している。どの国立公園に行ってもそのスケールとこれまで自分のもっていた自然観とはかけ離れた世界に驚き感動している。

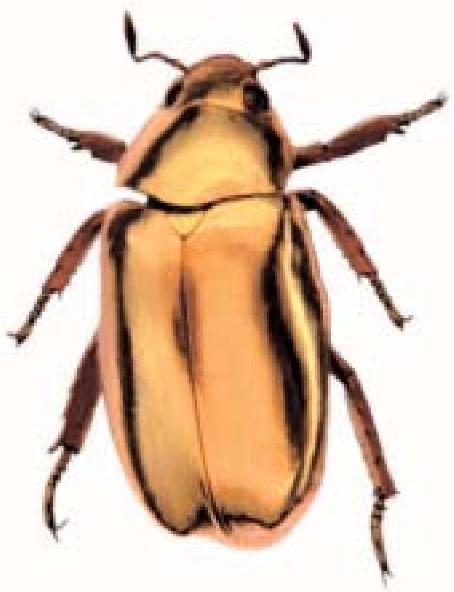
先日訪れたPetrified Forestはその中でも極めつけだった。地平線まで見える広大な砂漠に大木がたくさん転がっている。それだけでもなんだか異様なのに、それが木の化石、つまり岩石なのである。解説書によると、二億五〇〇〇万年前の三畳紀、この地方は緑豊かなところで、松や杉の大木に覆われていた。大洪水があり、大木が流され、この一帯に集まり砂と泥に埋もれた。普通は、腐敗してしまうのだけれど、上流から運ばれてくる泥が数百メートルも堆積したので、酸化から免れた。この付近には火山があり、泥の中に大量の火山灰が含まれていたため、水の中に溶け出した珪素が木の細胞と反応して石英の結晶を作り出した。結晶は少しずつ成長してついには木を石に変えてしまった。その後、雨などで大地が浸食され、硬い石となった珪化木が地表に姿を現した、ということだそうだ。

博物館で巨大な恐竜の化石を見ることがある。子供の時、それは確かに大きな驚きであった。大人になって見る化石は、驚きというより「想像力をかき立てる」ための重要なきっかけとなる場合が多い。その前に立っていると、当時の様子が目に浮かぶのである。博物館には大人になっても行くものだなどと考えるようになった。Petrified Forestは、そんな要素に満ちあふれている。誰もいない広大な砂漠の中で、巨木の化石と対面していると、本当に別世界にいる自分を実感できる。そして、自分の生活している場所が地球のほんの一部分であることが実感できる。気の遠くなるような地球の長い歴史の中の一瞬に自分が存在していることを感じる。

### カナブンのブローチ

前にも書いたが、昆虫のおもしろさは、ごく身近に存在していながら、その世界が驚異に満ちていることにある。生活・形・色、どれをとっても、我々人類とはかけ離れた世界がそこには存在する。昆虫とつきあえば、人間とは違う大きな世界が地球に少なくとも一つ以上存在することを知ることができる。それは、その人にとって、かけがえのないものとなる可能性がある。

以前この連載で構造色のことを書いた。昆虫の色の不思議である。我々には、昆虫とはこういうものだという概念がある。構造色は魅力に満ちた世界なのだけれど、この手法を使う昆虫は多いので、我々のもっている昆虫の概念の中に含まれていると考える人が多いだろう。また、この連載を



通じて紹介してきた昆虫の中にはコノハムシのような擬態とよばれる手法を使う昆虫もいる。擬態は本当におもしろい世界で、昆虫の世界の不思議を十二分に感じさせてくれる。昆虫の世界の不思議さを表す代表格といえよう。

今回紹介するのは、形や色ではない。質感である。形は日本にもいる普通のカナブンなのだが、どうしても生きているとは思えない。金属で作ったブローチといわれても誰も疑わないだろう。撮影にはすごく苦労した。鏡のように周りの光景が映ってしまうのである。カメラが映り込まないように撮影するという経験は初めてだ。まさに金属そのものである。昆虫はどの種類を見てもそれぞれに魅力があり、驚異に満ちているが、このようなものは他に見たことがない。天敵の鳥からみて食物とは思えないようにするための一種の擬態なのかもしれないが、どう考えても、金属としか思えない質感である。もっとも、こんなにきれいだと、ご婦人という天敵が現れるかもしれない。

## 概念

我々は自分の生活の中で、様々な概念をもって生活をしている。それは、生まれ育った環境とか、成長後の生活から得たものであろう。もう少し広く考えれば、その人が住む地方や国の文化の中で培われた個々人のもつ概念なのだろう。

インドのシャンディガールにいったことがある。ここは、フランスの建築家ル・コルビュジェによる人工都市である。この建設中に立ち退きを説得された農民が質問する、「この計画がうまくいってどうなる?」、答え「環境が整備される」。「環境が整備されるとどうなる?」、答え「経済が発達して、豊かになる」。「豊かになるとどうなる?」、答え、「勿論幸せになる」。農民の結論。「それなら今のままで私は十分幸せだ」。

人は、自分の概念から逃れることは難しい。自分のもつ概念の中で物事を判断せざるを得ない。とすれば、その概念をもっと多様化したり、広げたりすることはできないだろうか。旅行とは概念を広げるためのものなのかもしれない。また、趣味をもつということも他の世界を知るために有効なのだろう。山に行って満天の星を見たとき、人は自分の小ささを感じる。それはひとときのことで、すぐ忘れてしまうのだけれど、その時の感覚がその人のもつ概念に影響を与えていないとは限らない。

そのくらいのことはあるだろうと何となく考えていることを遙かに超えたことに遭遇したとき、一時的にせよ、その人のもつ概念が崩壊する。人工世界でもそれは起こりうるのだろうけれど、自然とのつきあいの中での方が、その確率は高いと思っている。

自分の考えていることが正しいとは限らない。自分の認識している世界はごく狭いものなのだという実感をもって、原点から自分のもつ概念を日々更新してゆくことは、とても大切なことなのではないだろうか。